2021 年 9 月 26日 聖霊降臨節第19主日礼拝メッセージ

「神(カミング) NGアウト」 岡嶋千宙伝道師

聖書 エステル記 7章 1－10節

「聖書の中で一番好きな書は何ですか？」

「神様によって書かれた神聖な書物に個人の好みを持ち込むなんてけしからん！」という意見があることも承知で、わたしの答えは、「一番なんて決められなーーい！」。じゃあ、一番は無理でも、三番までと言われたら、迷わずに、「ルツ記」「雅歌」、そして今日の「エステル記」をあげます。全部旧約。「なぜその三つ？」と聞かれると困るのですが、理由の一つは、人間味にあふれ、読んでいて引き込まれるところ。数字や規則や王さまの名前ばっかりというものがある中で、この三つは人間同士のやり取りがあって、登場人物の心の動きも見えてきて、普通に、読み物として楽しめます。「エステル記」は特にそれが顕著で、「なんでやねん！」と突っ込みをいれたくなる箇所を含め大好きです。

「エステル記」全体の筋書きはとてもシンプル。ギュッと要約すると、孤児として育ったユダヤ人の若い女性エステルが、異国の地ペルシア帝国で王妃となり、王の命令によって滅ぼされることになっていたユダヤ民族の命を救うという物語です。主な登場人物は４人。本書の名前にもなり、ユダヤの孤児でありながら、まれに見る美貌で王の愛を勝ち取り、王妃となったエステル。そのエステルのいとこで両親をなくした彼女を自分の娘として育てていた、同じくユダヤ人で、王宮の役人でもあったモルデカイ。モルデカイにとっての一番の上司、ペルシアの王でエステルの夫でもあるクセルクセス。そして、王に次ぐ権力者で「ユダヤ人の敵」とされるアガク人のハマン。この人物設定の段階で、すでにモルデカイ陣営と、ハマン陣営との争いの香りが漂うのですが、それを決定的にする出来事がおこります。

ハマンを重んじていた王は、すべての役人が、ハマンの前で膝まずいて敬礼するように命令を出していました。ところが、モルデカイはそれを拒み続けます。ハマンは、そんなモルデカイを憎むようになり、モルデカイを含む国中のユダヤ人を殺すことを企てます。巧妙な語り口で王の同意を得たハマンは、国中のユダヤ人を殺害することを王の命令として出すことに成功したのでした（3 章）。それを知ったモルデカイは、自分達ユダヤ民族に降りかかろうとする最悪の事態を回避するため、王妃となったエステルに望みを託します。王にかけあって、ハマン立案の計画を中止させるように訴えたのです。当時、王が命じるのでない限り王と面会することは許されず、それを破った者は死罪に処されることになっていました。王妃であっても、そう簡単には王の前に立つことを許されていなかったエステルは、始めのうちは訴えを退けますが、モルデカイの必死の説得によって、王に取り計らうことを決意しま

した（4 章）。命がけの決断。王に殺されることを覚悟で、エステルは、ユダヤ人根絶計画の中止を勝ち取るまで、3 度王の前に出ていきます。今日の箇所はその最後、3 度目の場面。クライマックスとも言える場面です。

舞台は王宮、エステルが主催した酒の宴の席。この宴に、エステルは王とハマンとをゲストとして招いていました。ハマンはユダヤ人絶滅計画の首謀者。ですが、この時点で、すでにハマンのもくろみの一部は破綻していました。宴の前の日に、ハマンが憎むモルデカイが、過去の功績を認められ、王から栄誉を与えられていたのです（6 章）。それまでの二回の対面で、王はエステルに、「何でも願うものは言ってくれ」と伝えていました（5:3、5:6）。エステルはそれに直接に答えず、いずれも、「わたしが催す酒の宴に、ハマンと一緒に来てほしい」と答えます（5:4、5:8）。そして、2 度目の宴の席で、王は再びエステルに尋ねます。「何を望むのか。何を願うのか。王国の半分に至るまで、あなたの望むものは与えよう」（7:2）。3 度目の正直。エステルは答えます。それまで隠していた自分の出自、ユダヤ人であることを明らかにし、自分を含めたユダヤ民族が絶滅の危機にあり、その計画を中断させて自分達の命を救うことが望みである、と王に訴えたのです（7:3-4）。王は答えます。「そんな企みをするのはいったい誰なのだ？」（7:5）躊躇することなく発せられるエステルの言葉。「ハマンです。」（7:6）その瞬間、ハマンは恐れおののき、一方の王は怒りのあまりに宴の席から飛び出します（7:6-7）。茫然自失のハマンに、追い討ちをかけるかのように知らせが届きます。王によって功績を称えられたモルデカイを殺そうとして、自分の家に処刑台をたてたいたことが暴露されるのです（7:9）。宴の場に戻ってきた王は、ハマンをその処刑台にかけることを命じ、ハマンは自分がたてた処刑台で命を落とすことになりました（7:9-10）。

8 章以下には、ハマンに代わり、モルデカイが王の腹心として登用され、彼の計らいによって計画は中止になり、ユダヤ人たちが命の危機を脱したことが記されています。逆に、ユダヤ民族の根絶を企て、それに関与しようとしていた人たちは、ハマンの家族を含めてユダヤ人によって殺されました。それ以降、民族絶滅の危機を乗り越え生き延びたことを、ユダヤ人は喜び記念することになったと伝えられています。

再び今日の場面。国の最高権力者である王の前に立つエステル。身寄りがなく頼りない娘ではなく、自分の意思を持ち、その意思を表明し、表明した意思に基づいて行動する、一人の自立した女性。はじめからそうだったわけではありません。2 章では、モルデカイの命じることを忠実に守り、従っていたとされるエステルが、「王宮に連れてこられ」、「化粧品と食べ物を与えられ」、「王のもとに連れていかれ」、「王に愛され冠をかぶせられ王妃にされた」と伝えられます（2:8-10、17、20）。主体性がなく、受け身で、自分の意思を持たず、誰かに動かされる存在。ここで、エステルの言葉が一切記されていないことも彼女の主体性のなさを示して

います。それが、劇的に変わるのです。王の前に立つエステルの姿は、まさしく「何ということでしょう」。

何がエステルを変えたのか。要因の一つは、生活の場の変化にあります。王妃になる前のエステルは、モルデカイのもとで、王宮の外で暮らすユダヤの孤児でした。それが一転し、王宮で王妃として暮らすようになるのです。場所が変われば、日々交わる人々も当然に変わります。そして、エステルが王宮で出会った人たちの中で、影ながらに物語全体を通して重要な役割を担う存在。宦官（かんがん）。ペルシアを始め古代の国々では、王のための働きをなす宦官と呼ばれる役人が活躍していました。何らかの理由で生殖器の一部または全部に欠損があり、生殖能力を含めた一般的な男らしさを持たない人たち。伝統的なユダヤ社会では、礼拝や祭儀などの集いの場において、そのような人物の参加は認められていませんでした（申命記 23:2）。共同体にいながら、完全なメンバーとはされず、弾き出された存在。そのような宦官が、「エステル記」には多く登場します。その多さは、新約を含めた聖書の書物の中で群を抜くもの。他の書では、いてもせいぜい一人か二人。ですが、「エステル記」には少なくても 12 名の宦官が登場します。もちろん、エステルの周りにも。王妃になる前のエステルの世話役であったヘガイ。王妃になったあとの付き人ハタク。さらにエステルとは直接関係ない場面でも、今日の箇所を含め、物語の転換ポイントで複数の宦官が登場します（1、2、4、6、7 章）。エステルは、王宮で過ごすようになってから、いとこで義父のモルデカイではなく、自分の近くで触れる宦官たちに大きな影響を受けていたと考えられます。

具体的にどのような影響だったのかは明示されていません。ここからは、わたしなりの解釈です。「エステル記」において、宦官は、境界線を自由に越える人物として描かれています。物語のメインキャラクターのうち、モルデカイ、ハマン、クセルクセス王は、自分自身の場に固定され、そこから出ていきません。王は王宮に、ハマンは王宮と反ユダヤ戦略立案の場である自分の家に、モルデカイはユダヤ人としての立ち位置にとどまり続けます。エステルは少し事情が異なり、王宮とユダヤ人としての立ち位置とのどちらにも身を置きますが、いったん王妃になってからは王宮の外へ出ようとしません。彼女・彼らは自分の場を越えて、別の場にいる他の人たちと交わることがないのです。それを繋ぐ存在。自分の場に固執するメインキャラクターの間を自由に行き来する存在。あるときは王宮で、あるときは王宮の外で、人と出会い、人に語り、人にメッセージを伝える存在。ユダヤ社会での受け止められ方にあるように、宦官は、欠けのある人とみなされていました。共同体にいながら、完全なメンバーとなることを許されず、言わば二流の住人とみなされる。異質な者として、人々から距離をおかれ、時に排除される。古代社会で宦官が王の付き人として重用されたのは、市民の間では孤独である彼らに保護を与えることで、王に仕える者としての一層の忠誠心を引き出せるからという理由もあったそうです。異質な者、不完全な者として見られることの痛みを知っている。壁を作ること、敵対す

ること、排除しあうことの痛みや苦しみを知っている宦官。

王宮で過ごす間、エステルは、宦官から個人的な経験を含めた話を聞き、彼らの生きざまを知るようになったのでしょう。そして、自分の立ち位置に縛られず、対立の壁をこえて、自由に人々と出会い語り合う彼らの姿の背後に、大勢の人たちとは異なることによる過去・現在の痛みがあることを見いだしたのかもしれません。エステル自身、両親を持たない孤児として、あるいはペルシア人から見たときの異邦人として、大勢とは異なること、人々から違う目でみられることの怖さや苦しさを知っていたはずです。エステルが、命の危険を犯してまで王にユダヤ人根絶計画の中止を訴えたのは、モルデカイの説得だけではなく、宦官たちと生きるなかで、エステルの内に募っていった思いがあったからと考えられます。社会から弾かれながらも、人を分け隔てる境界線を自由に超えて生きる宦官の姿に触れるうちに、対立や憎しみによって人々が疎外され、存在や命が消されていく状況に耐えられなくなっていった。だから、一人一人の存在が大切にされるために、たとえ自らの命を危険にさらしたとしても、自分の意思を表明し、行動していく決意をした。

「エステル記」には、聖書の他の書とは異なるいくつかの特徴があります。何より驚くのは、全体を通して、神の名が語られていないこと。「主」という呼び名もありません。信仰的・宗教的なことも、モーセの律法も食事規定も、祈りさえもありません。神は NG ワード。また、「エステル記」は「ルツ記」とならんで女性の名前が書名になっている数少ない書物のひとつです。聖書の他の書物とは異なる特徴を持つのですから、その理解のためには、「エステル記」の中に描かれる見慣れた風景、聞きなれた言葉ではなくて、どこかしっくりこないところ、これまであまり見なかった存在、注目されなかった箇所にこそ目を向ける、というのも的はずれではないように思えます。神不在の書物の中で、神のメッセージを伝える存在として、他のキャラクターたちとは全く異なる宦官の姿に着目する。それによって気づかされること。痛みを背負うからこそ担える働きがある。人の苦しみを知っているからこそ、誰か別の人や民族の運命を変える力となりうる。宦官との出会いを通して、エステルが、主体性のない受け身の女性から、自分の意思を持ち自分は何者でどう生きるかを表明し行動する女性へと変えられたように。

そういえば、聞いたことがあります。宦官と同じように生きた人がいた。神と人との境界線を越えてこの世に生きた人。ローマの支配権力だけではなく同胞のユダヤ人から嫌われ、弟子たちにも見捨てられた人。当時の社会で異質と見なされていた女性、徴税人、病人などと出会い、食事を共にし、語り合った人。自分自身が異なりを持つ者として生き、出会う人々を変えていったその人イエス。そんなイエスに出会い、変えられた一人として。わたしもまた、イエスのように、異なる人々と出会い、彼女／彼らと共に生き、語り合い、お互いの違いを認め、共に生き、共に変わり続ける者でありたい。そう願います。